



esashiファーム代表

よしひこ  
片岡仁彦

電話

福井市江守中1-512  
0776(34)7758

収穫を間近に控えた圃場——と表現するには、あまりにも寒々しい光景だった。株の列が大きく蛇行した大豆。背丈は低く、完全に雑草に覆われてしまった箇所もある。茎葉が青いまま伸び、汚粒の原因となる

# 抜ける日へ



▲実をつけた片岡の大豆。辺り他の圃場を見回すと、こうした成育の良さが「例外」だと分かる。よその圃場では、この夏の豪雨・台風の影響で、倒れかけた大豆も目立つ。(写真：片岡仁彦)

■「コメどころ」と言われながら兼業化が進む福井県で、転作の受託に活路を見出した経営者がいる。自らも兼業農家に生まれ、脱サラ就農。その経歴が「農家に対する営業力」につながり、補助金を当てにしない姿勢を買ってきた。目覚めた者ゆえの苦悩と葛藤を抱えながら、未来への扉を開こうとする。その原動力は「勇気一つ」(秋山基)

「青立ち」が、ほぼ一面にまん延した圃場も珍しくはない。

「この辺りでは、こういう転作田が普通なんですよ。たいていは作物を真剣に作ろうなんて気は全然ない。作業を受託する農家も、転作奨励金を地主と分け合えればそれでいいんでしょう」

片岡仁彦はそう口にして、「モラルが低いんですね」とつぶやいた。

福井県福井市。県庁や市役所のある中心街から車で15分も走れば、稲作地帯に入る。ただ、周囲には幹線道路が走り、宅地化も進んでいる。通りに面して量販店やディスカウントストアが並び、背後には圃場整備された水田が広がる。農道沿いには、真新しい集落営農の格納庫が点在している。

片岡はこの地域で、大豆とジャガイモの栽培を中心に農業を続けている。大豆はすべて周辺農家から請け負った転作で、奨励金は基本的に地主に渡す。が、先に述べたような「普通の転作田」と、片岡が任された圃場の差は歴然としている。株はまっすぐに並び、雑草も目立たない。青立ちも、多少見られるといった程度だ。

「私は補助金に頼りませんから、大豆がどれだけ採れるかが勝負です。それに、受託した転作田を草ば

## 新 農業経営者ルポ / 第6回

# 勇気一つ。世界へ突き



▲福井県はコシヒカリ誕生の地で、言わずと知れたコメどころ。自作地を中心に水稲も手掛けている「だけど、幸か不幸かコメ作り一筋とはいかなかった」（撮影は7月）。



▲ブラウをかけた後の圃場。転作田とは言え、「きっちり管理して地主さんの信頼を得なくては意味がない」（片岡）。作業を「請け負う」というよりは、「やらせていただく」という営業姿勢だ。





▲ずらりと並ぶ工具類。整理整頓にも気を配る。「格納庫の中が散らかっていたら、良いものは作れない」と本人。



◀ベアリングの圧入などに使う油圧プレス。メカニック出身だけあって、格納庫には「工房」の雰囲気漂う。

うぼうにしてしまったら、地主さんの理解は得られませんよ」  
毎年、20ha以上に大豆を作付けするような受託者は、片岡を除けば周囲に一人もない。収穫後、農協に運搬すると、アルバイト職員が「また、こんなにたくさん豆を作って来て」とあきれられるのだという。

### 夢のない青春 メカニック出身の脱サラ就農者

「不評ですよ。彼らの仕事を増やすことになるんだから」と、本人はいたって屈託がない。  
片岡は兼業農家の長男として生まれた。学生時代は自動車やバイクに

凝り、地元の大学で機械工学を学んだ。

祖父、父は2代続けて市役所に勤めたが、片岡は公務員になる気はなかった。「勉強は嫌いでしたし、無気力って言うんですかね。将来への夢が何もなかった」。

結局、実家が兼業でメカが好きという理由から、J A福井市に就職する。マシンセンターに配属されれば、農機の修理ができると考えたからだった。

しかし、J A勤務は3年も続かなかった。購買部に回されたのは仕方なかったとしても、夜になると、各農家を回り、家庭用パン焼き器、背広、宝石といった商品を販売する仕事があったのだ。

「なんでJ Aが農家にパン焼き器を売ったのか、さっぱりわからなかった。当然、売れるはずがないんだけど、そうになると、支店長以下、給料から自腹を切って売り上げを増やすんです」

嫌気がさしてJ Aを辞め、知り合いを頼ってBMWのサービス工場に転職。受付係を1年務めた後、メカニックとして働けるようになった。片岡にとっては元来、好きな分野でもある。やがて顧客から整備の指名

を受けるまでに腕を上げた。

「他のメカニックは、作業をお客さんに見せたがらないのですが、私は見せて、納得してもらおうように心がけたんですよ」

だが、顧客からの評価は、同僚たちから妬まれる原因にもなった。加えて、片岡は「ダラダラ残業」を嫌った。自分の仕事を済ませ、残業の必要がなければ、定時に退社していたため、ますます周囲からは浮き上がった。

そんな頃、たまたま県の農政担当者や何人かの専業農家と知り合い、何回か話すうちに漠然と就農を思い描き始める。

「たぶん、ずっと前から頭の片隅には農業があったのでしょ。家は兼業でしたが、農作業は面白いなと感じていた。だけど、きっかけがなくて踏み切れなかった」

きっかけは、93年の冬に起きた。当時の細川首相がG A T Tウルグアイラウンドに合意し、ミニマムアクセスに基づくコメの輸入解禁が決まった。

「これからは水稲をやめる農家が出てくる」。そう直感すると、片岡は7年間務めたBMWを辞め、95年、1.3haの水田で専業へのスタートを切った。

# 勇気一つ。世界へ突き抜ける日へ

## 借地できない土地柄 ムラを超えれば世界が広がる

「とにかく面積。規模拡大しないとダメだと思いました」と、片岡は就農当時の心境を語る。自作地で採れたコメを直販すれば、そこそこの収入は得られた。実家のある地区に機械利用組合ができたため、オペレーターをしながら、自由に農機を使うこともできる。県内外の優れた経営者を訪ね歩き、栽培技術や経営手法についても貪欲に学んだ。

あとは、面積。焦りにも似た気持ち

▲プラウを引く諸岡のクロトラクタ。フランスからの帰国後すぐに購入した。実質馬力は150以上ある。



ちから、「水田を貸して下さい」と印刷した折り込みチラシを作り、新聞販売店に頼んで2000枚まいた。だが、目論見は見事に外れた。「いいアイデアだと思ったんですけど、ダメでした。この辺には農地を貸してくれる農家がいらないですよ」

片岡は少年時代、学校の同級生に自分の住む地区を「ざいご（在郷・田舎の意）」と馬鹿にされ、嫌な思いをしたことがある。「自分の家は田舎にあるのか」と、半ば驚きつつ傷つき、「しばらくは、友達を家に

▲ホイールトラクタは現在、ジョンディーア社製を2台保有。その他、県外の知人からセミクローラも借りる。



呼ぶのを避けるようになった」と回想する。

この経験は地域の特徴をよく表している。福井市では水田地帯と市街地との距離がそれだけ近く、兼業農家と都市部の住民が、お互い背中合わせで暮らしているからだ。

地主の農地に対する執着も、市街地からの「距離」が絡んでいた。

「街に近いから、農地の資産価値が高いんです。地主さんにしてみれば、うっかり他人に貸して賃借権が付いたら、いざと言う時に売れない恐れがある。コメ作りは週末だけでも可能だし、だから米価が下がっても、後継者がいなくても田んぼは貸さない。そういう土地柄だったのかと初めてわかった」

人づてになんとか3・2haだけは借りられたが、その後は悩む日々が続いた。その挙句、ようやく目を付けたのが転作の受託だった。地主が麦を作った後に、大豆を作らせてもらい、土を起こして返す。そんなことができる所はないか。JA職員に仲介してもらい、片岡は市内の農家を回った。

「びっくりしたことに、10ha、20haと簡単に集まった。どう頑張っても借地はできなかつたのに、なんだこれ？ って思いましたね」

農地を任せられる以上、できるだけ

信頼に込めたいと、畑作用の機械化に乗り出す覚悟も決めた。農機メーカー社員に誘われ、99年、フランスの農業展示会「SIMAショー」を見に行った片岡は、会場の熱気に圧倒される。

「世界各国から人が集まってくるし、その中には日本人もいる。だけど国内の展示会とは来場者の意識が違う。展示品を見る目つきが違った」人は視野を狭く持てば、ムラの中にしかいられない。しかし、いったんムラを吹っ切れば、一気に世界が広がる。「勇気一つで、どこまででも行ける」と、その時片岡は感じた。帰国後、JAから3000万円の融資を受け、トラクタ2台と各種作業機、それに4トトラックなど、必要な機械をすべてそろえた。

## 畑作の面白さに目覚め ジャガイモ作りへ

転作作物には「捨て作り」という言葉がある。生育が悪ければ、収穫もせずに株を碎き、さつさとソバを播いてしまうような農家もいる。だが、片岡は「大豆を通じて畑作の面白さに目覚めた」と語る。

麦作の後、土の乾き具合を見てサブソイラをかけ、プラウで起こす。碎土、鎮圧し、播種。元肥としては過燐酸石灰と尿素をまく。





▲田端農機の播種機TEB-4WR。加えて一昨年、仏サルキー社製コンパクトマスターも購入した。



◀「除草剤は、あまりまきたくない」と言う。「作物が育成する環境をいかに整えるかで、雑草は抑えられる」

雑草の多い転作田では、多い所で4回は中耕培土する。カルチベータにも施肥機を付けて、必要に応じて尿素を補えるようにした。「考え方としては追肥ではなく、分肥。大豆に窒素は必要ないと言う人もいますが、私は必要だと思う」

生育ステージに合わせた施肥によって大豆がよく育ち、雑草を抑えられる。除草剤は播種時に1回。反当たり501を低圧ノズルで散布する。

2000年からは、本誌の経営実

験に参加し、カルビーポテト(株)との契約でジャガイモの栽培にも取り組んでいる。市内から車で片道1時間かかる丘陵地に空いた農地が見つかり、2年前には10haの作付けにも挑んだ。

「あれは失敗。規模の大きさに憧れがあるものだから、やってやろうと思いましたが、甘かった。忙しすぎて精神的に追い詰められるし、その分、管理も行き届かない」

その年は反収も伸びず、売り上げは、面積の割に少なかった。このた

## 地主のエゴとムラの呪縛

片岡は2001年から、実家のある地区で集団転作にかかわってきた。平均60〜70aの水田を持つ兼業農家らと調整し、地区で計2haの減反を固める。片岡は地主に代わって麦・大豆を作り、転作奨励金として地主が反当たり6万3000円、片岡は高度利用加算金の1万円を受け取る。転作田はブロックローテーションで順番に回すという取り決めだった。

しかし、昨年、コメ政策の転換で、奨励金の先行きが不透明になると、地主の間に動揺が広がった。要件の2haがどうしても満たせず、仕方なく、転作面積を1・7haに減らすことになった。

その代わり、片岡はジ

ヤガイモとソバを作らせてもらった。地主たちにはソバの補助金だけでなく、ジャガイモで得た利益の一部も払うと言いつけ、なんとか理解にこぎつけた。

ところが、今、地区では来年の作を巡って、話し合いの収拾がつかないでいる。次のローテーションで転作に該当する一部の地主が「どうせ、補助金が当たらなくなるのなら、自分で作ったコメを食べたい」と主張し始めたからだ。

その言葉に片岡は体の力が抜けた。「自分で作る」と言うが、現実には機械利用組合の水稲農機を使い、そのオペレーションや整備には片岡が時間を割いている。乾燥調整施設にしても、地区の人たちは代金を払って片岡家のものを使う。その意味では「自分で作ったコメ」など、どうの昔に存在しなくなっている。

このまま話し合いがまとまらなければ、地区の転作田は虫食いとなり、来年のジャガイモ作に向けての準備が進められない。地区で唯一の専業農家が片岡なのだから、皮肉としか言いようがない状況だが、これは日本農業の歪みを象徴する現実なのかもしれない。

「農地は、作物を食べてくれる人のための公共物でもある」。地区で、そう訴え続けてきた片岡自身、これ

# 勇気一つ。世界へ突き抜ける日へ

ほど虚しいエゴイズムを見せ付けられるとは、想像もしていなかった。

「落胆しますよね。今まで地区で責任を果たそうとしてきたのに、なんにも伝わってなかったのかと。土地にしがみつくと人の気持ちはわかります。だけど、私自身もまだムラの中で手足を縛られているんだな」

歪んだ現実に翻弄されれば、うっ屈が積み重なる。果たして突破口は見えてくるのか。



▲今年5年目に入ったジャガイモ。もう1カ所の圃場は35km離れている。この後豪雨の影響を受けたが、被害は軽くすんだ。(写真：片岡仁彦)

## オーストラリアの夢を 現実の構想に

片岡は今年から、同じ市内で水稲の受託を手掛ける白竹保隆との共同作業を始めた。白竹は現在、26歳。片岡同様、兼業農家の家に生まれ、いくつかの職を経て、就農した若者だ。

受託者同士、これまでも圃場付近ですれ違ったことはあった。

「片岡さんは近寄りがたかった。仕事はきっちりしているし、僕なんかには、遠い存在でしたよ」と、白竹は言う。

片岡の方も「若いのがやっつるな」と視線を送るぐらいで、声をかけたりはしなかった。その2人を地元の改良普及員が引き合わせ、何度か話そうちに気が合った。白竹が今年、転作も引き受け始めたのを機に、片岡は畑作機械と労力を提供することにした。

白竹は、水田の受託を1人で10haこなしている。「彼、農家への営業がなかなか上手いんですよ」と片岡は評す。また、二人の力を合わせることで、より多くの地区から農地を集められれば、しがらみや個別事情に振り回されなくても済むメリットが見込める。近い将来、会社を立ち上げ、経営を統合できないかと、今



## 片岡仁彦

esashiファーム

### 【プロフィール】

1963年3月生まれ。脱サラして95年就農。転作田の作業受託を中心とした経営で、今年の作付けは大豆24ha、水稲4.5ha、ジャガイモ3ha、ソバ2ha。年間売上高は約3000万円。サラリーマン時代に結婚した妻との間に3男。

二人は考えている。

今年2月、片岡はオーストラリアの農業事情を見に出かけた。飛行機を乗り継いだシンガポールのチャング国際空港には回転寿司の店があった。外国人が寿司をつまむ姿を自分の目で見て、「日本食ブーム」を実感したという。

「いけると思いましたよ。オーストラリアの農地には土壌水分が足りないという課題がありました。どこに売ってきたら陸稲を作りたい。どこに売ることが問題ですが、加工用なら可能性がありそうかな」

片岡が語るオーストラリアの夢は、白竹にも伝わっている。

その夢が事業構想へと実を結んだ時、2人がムラを超える日が本当にやってくるのかもしれない。

呪縛から逃れるためではなく、世界へと突き抜けるために。(敬称略)